

〔野生動物による造林木の新たな被害実態の解明に関する研究〕

化学繊維製のシカ柵を加害する野生動物の推定

新井一司・久保田将之

(緑化森林科)

【要 約】 日の出町の再造林地に設置した化学繊維製のシカ柵に野生動物によると思われる多数の穴が空いており、加害獣は、タヌキとノウサギによるものと推定される。このシカ柵は、これらの野生動物に噛み切られない金属製を用いるなどの対策が必要である。

【目 的】

西多摩郡日の出町大久野の再造林地に設置した化学繊維製のシカ柵に、野生動物によると思われる多数の穴が空いていた。そこで、被害の実態を把握するとともに、加害獣の推定を行った。

【方 法】

調査地は、西多摩郡日の出町大久野にある0.6haの再造林地である。標高は220～280m、傾斜角は6～45度の北西斜面である。化学繊維製(Dyneema, Toyobo)のシカ柵は、網目100mm、地上設置高2.0m、垂らし部0.5mであり、2016年10月下旬に設置された(図1)。シカ柵の全周450mを2017年3月28日に踏査し、穴の位置、噛み切りの痕跡の詳細を記録した。同日、空いた穴を応急措置として結束バンドで閉じた。その後、シカ柵の被害調査と補修を2017年8月17日、2018年4月27日に行った。補修した1カ所にセンサーカメラ(HC500, Reconyx)を2017年8月24日に配置し、加害する種を推定した。

【成果の概要】

1. 鋭利な刃物で切ったような切断面のタイプAと、何度も噛まれた後、切断されたタイプBの2つに分けられた(図2, 3)。シカ柵を設置してから5ヵ月後、タイプAの穴の数は5カ所、タイプBは10カ所の合計15カ所(0.3カ所/10m)であり、その分布は、偏ることなく混在していた(図4)。
2. タイプAは、鋭利な切断面の特徴からノウサギと推定された。センサーカメラには、タヌキ、アライグマ、アナグマ、ハクビシン、キツネ、ノウサギ、ニホンジカ、イノシシが写っていたが、補修したシカ柵の穴に近寄ったり、網を啜えたりしていたのは、タヌキだけであり(図5)、タイプBの切断は、タヌキが主であると推定された。
3. 2017年8月17日の被害は、すべてタイプBであり30カ所(0.7カ所/10m)、2018年4月27日の被害は、69カ所(1.5カ所/10m)ですべてタイプBであり、このタヌキと推定された被害は継続して生じていた。シカ柵設置後1年6ヵ月間の延べ被害数は、114カ所であり、このようなタヌキやノウサギなどが生息する地でニホンジカから植栽木を守るには、高い頻度でシカ柵を点検、補修する必要がある。

【残された課題・成果の活用・留意点】

この地には、タヌキ以外にアライグマ、アナグマ、キツネが生息しており、これらも化学繊維の網を噛み切る能力を有しているため、いずれの野生動物にも噛み切れない強度の金網を用いるなど抜本的な対策が必要である。



図1 化学繊維製のシカ柵

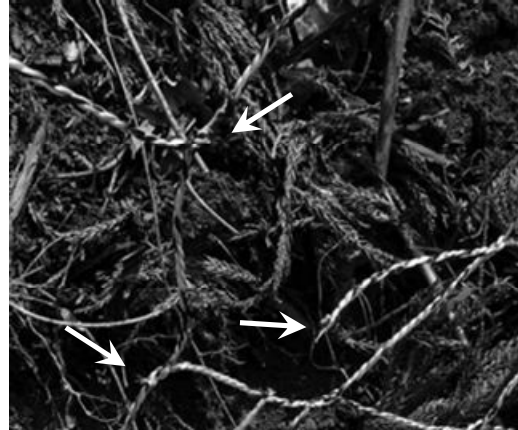


図2 タイプA
(鋭利な刃物で切ったような切り口)

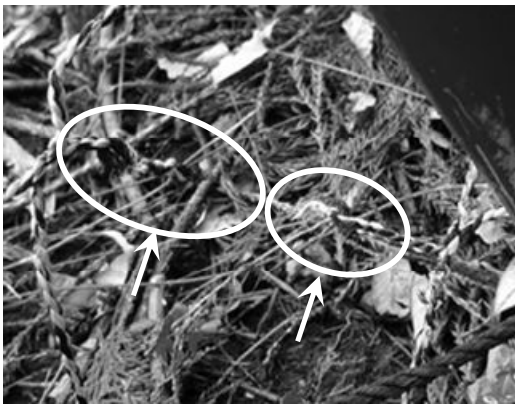


図3 タイプB
(何度も噛まれた後、切断)

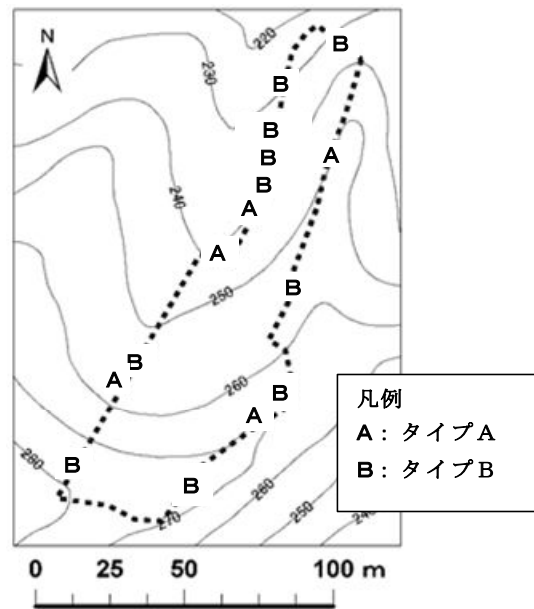


図4 被害分布図(破線はシカ柵)



図5 補修したシカ柵に近づき網を咥えた2頭のタヌキ